

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23390495

研究課題名(和文)災害に対する看護の備えに関するグローバル・ナショナルスタンダードの構築

研究課題名(英文)Development of global and national standards for disaster preparedness in nursing

研究代表者

山本 あい子(YAMAMOTO, Aiko)

兵庫県立大学・付置研究所・教授

研究者番号：80182608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,400,000円、(間接経費) 4,320,000円

研究成果の概要(和文)：目的は、国内外で使用可能な、看護学分野の災害に対する「備え」枠組みを明らかにすることであった。枠組みは、4大項目(ケア提供、看護教育、看護管理、看護研究)と7中項目(物・施設・設備、人、予算・費用、組織・システム、地域特性・文化・制度、情報・コミュニケーション・ネットワーク、理念・心構え)、各中項目の下に計131項目を作成した。デルファイ法にて、各項目の重要性を検証し、ケア提供35項目、看護教育20項目、看護管理55項目、看護研究20項目、合計130項目からなる備え枠組みを構成した。結果から枠組みの使用可能性と、国内外調査の比較で、「信念・心構え」に相違があり、今後の探求の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop the framework for disaster preparedness on disaster nursing. The framework consists of 4 categories: care provision, nursing education, nursing management, and nursing research with seven sub-categories: 1) supplies/equipment, 2) personal, 3) budget, 4) organization/system, 5) regional characteristics/culture, 6) information/network, and 7) attitude. Total 131 items were extracted. The Delphi method with three times was utilized for data collection. The questionnaire was responded by nurses, faculties/teachers, and researchers in disaster nursing. The framework was revised with total 130 items, including 35 items in care provision, 20 items in nursing education, 55 items in nursing management, and 20 items in nursing research. In overseas research, incongruent of the results was found in philosophy/attitude in comparison with the results of Japan. The possibility of usability and further research to explore cultural sensitivity were suggested.

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：災害看護 備え枠組み 備え基準 デルファイ法

1. 背景

WHO は(2008)、人間社会にとって災害としての意味を持つかどうかは、災害を生じさせる出来事とそれに対する対処能力とのバランスにおいて決まると述べている。発生した出来事が災害につながるかどうかは、その性質のみから予測することは困難であるが、いかに防災・減災を行い、災害に対して備えていくかが、被害を最小限にとどめる上で重要であることが指摘されている(広瀬, 2004)。同時に、備えの難しさも指摘され、備えに向けた行動化の必要性が強調されている(山本, 2005)。災害の被害軽減のための概念枠組みとして、看護以外の学問分野において、危険に対する人的要素・自然により生じた危険に加えて、脆弱性を強める要素と弱める要素・減災につながらない災害管理・効果的な減災管理が挙げられている(Birnbaum, 1999)。脆弱性をより少なくすることや、管理体制を強化すること等の「備え (preparedness)」に着目していくことは、社会的に意義が高く重要なところである。また、災害への備えは危機管理上の重要な側面の一つであり、個人レベル、組織レベル、国レベル等で異なるが、備えの枠組みとして「計画」「組織化」「訓練」「練習」「装備」「評価」「修正行動」等があげられており、継続的に行う過程として捉えられている (Homeland Security, 2007)。

一方、災害の備えに関する看護分野の研究からは、物品や情報の重要性、コミュニケーションルートの必要性、看護管理者の果たす役割の大きさなどが言及されている (Lee, 2006)。また、大規模災害時に多くの生命を救うためには、受け入れ可能なケアの質を準備すること、情報の集約と発信、マンパワーの確保、ケア提供の整備が重要であることも明らかとなってきた(山本, 2008)。しかしこれらの備えに関する研究結果は、看護学全体を踏まえた枠組みというよりは、ケア提供あるいは教育などといった一側面からの

ものとなっている。

この様な現状を踏まえて、昨年までに実施した研究から抽出した「看護における備え枠組みの要素」を基盤とし、次段階として看護の備え枠組みのグローバルスタンダードとナショナルスタンダードの提示を行う。本研究から得られる備え枠組みは、看護における「備え」状況の査定標準となり、その結果、備えに向けて実施すべきことを明確にできるものとなりうる。

2. 研究目的

本研究の目的は、看護学分野における災害に対する備え (preparedness) 枠組みの妥当性を検討し、日本国内外で使用可能なグローバルスタンダードならびにナショナルスタンダード2種の「備え」枠組みを明らかにすることであった。

3. 研究の方法

デルファイ法を用いた量的研究法を用いた。

(1) 質問紙

質問紙は、4つの大項目：ケア提供、看護教育、看護管理、看護研究で構成されている。それぞれの大項目の下に、7つの中項目（物・施設・設備、人、予算・費用、組織・システム、地域特性・文化・制度、情報・コミュニケーション・ネットワーク、理念・心構え）を設定した。各中項目の下には、小項目があり、合計131項目から構成されていた。これらの項目は、文献検討、エキスパートパネル、昨年までの研究結果から導き出されたものである。「大変重要である」から「重要ではない」の5段階での評価を、小項目ごとに依頼した。海外調査においては、日本国内調査で使用した質問紙を英訳し、調査を行った。

(2) 研究協力者

災害看護関連の学会や学会誌に発表をしている人の中で、災害看護の実践者、教育者、研究者とした。

(3) 調査方法

データ収集にはデルファイ法を用い、研究協力者には、質問紙に3回の回答を依頼した。2回目の調査には、1回目の調査で回答が得られた者を対象とした。1回目の調査結果を添付し、その結果を参考にしつつ、2回目の調査用紙への回答を依頼した。3回目の調査も2回目調査に回答した人を対象として、2回目の調査結果を添付しつつ、回答を依頼した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、兵庫県立大学・地域ケア開発研究所研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

(1) 日本国内調査結果

43名の研究対象者に質問紙を送付し、1回目は14名からの回答を得た。2回目調査では、1回目の協力者である14名に質問紙を送付し、8名が回答し、3回目は2回目の協力者である8名を対象として質問紙を送付し、4名から回答を得た。

調査結果は、4つの大項目ごとに記載しているが、研究協力者の70%以上が「とても重要である」、あるいは「重要である」と答えた項目をコンセンサスが得られた項目とみなしている。

1) ケア提供

ケア提供には36の小項目から構成され、1回目調査から3回目調査まで、すべての項目において70%以上のコンセンサスを得ることができた。

一方、3回目の調査で、「大変重要である」、「重要である」、「どちらともいえない」に回答が分散した項目として、中項目「組織・システム」中の「災害時に必要となるケアのための業務行動計画がある」、ならびに中項目「情報・コミュニケーション・ネットワーク」中の「ケア提供に関わる人々の間で情報を共有している」の2小項目があった。これら2項目とも、70%の合意は得られたものの、回

答が分散していることから、記述内容および他の項目との重複性等を検討し、文章表現の修正と項目の統合を図った。「組織・システム」中の小項目である「災害時に必要となるケアのための業務行動計画がある」は、他の項目「災害時の業務行動計画を定期的に評価し、必要時修正している。」と統合し、「災害時に必要となるケアのための業務行動計画を作成し、定期的に評価し、必要時修正している」に変更した。また、「情報・コミュニケーション・ネットワーク」中の小項目「ケア提供に関わる人々の間で情報を共有している」は、より明確になるように文言修正を行い、「ケア提供に関わる人々の間で、共有する情報を確認しておく」に修正した。2項目が1項目に統合された結果、ケア提供は合計35小項目となった。

2) 看護教育

看護教育に関する備えは、20の小項目から構成されていた。1回目の調査時に70%以上のコンセンサスが得られた項目は、20項目中18項目であった。

70%以上のコンセンサスが得られなかった2項目は、中項目「予算・費用」中の「教員が災害看護の研修や学会に参加するための資金を確保している。」、ならびに「所属施設(教育機関)は災害看護教育に必要な予算を確保している。」であった。また、70%以上のコンセンサスは得られたものの、「あまり重要ではない」との回答が見られた項目が1項目あったが、2回目の調査を実施した。

2回目の調査では、20項目中19項目において70%以上のコンセンサスが得られた。

1回目の調査で70%以上のコンセンサスが得られなかった2項目については、2回目の調査では、70%以上のコンセンサスを得ることができた。その一方で、2回目の調査で70%以上のコンセンサスを得られなかった項目は、中項目「組織・システム」の「災害看護教育の一環として、学生や教員が災害支援に

参加できる体制を整えている。」であった。この項目は、1回目調査時に70%以上の合意を得られていたが、「どちらとも言えない」との評価も得ていた項目であった。この項目は3回目調査の質問紙でも、そのまま採用し、コンセンサスの動向を見た。

3回目調査では、20項目中19項目について70%以上の同意が得られた。1回目、ならびに2回目調査時に、70%以上のコンセンサスが得られなかった3項目は、3回目の調査では70%以上のコンセンサスを得ることができた。

3回目の調査で、70%以上のコンセンサスを得られなかった項目は、中項目「予算・費用」の「教員が災害看護の研修や学会に参加するための資金を確保している。」であった。この項目は、2回目調査時では、「大変重要である」、「重要である」に回答が集約していたが、3回目にどちらとも言えないが50%となった。回答に揺れが見られた理由として、「教員個人が資金確保をする」と理解されたのではと思われることから、表現を「教育機関は、教員が災害看護の研修や学会に参加するための資金を確保している。」と修正し、項目から削除しないこととし、計20項目のままとした。

3) 看護管理

看護管理分野の小項目は、55項目であった。1回目調査から3回目調査まで、すべての項目において70%以上のコンセンサスが得られた。1回目調査時に、「どちらとも言えない」の回答が得られた項目は38項目であり、2回目調査時には、18項目に減少した。つまり、20項目は、2回目調査時には、「大変重要である」、「重要である」の回答に集約されたことになる。さらに3回目の調査で、すべての項目が「大変重要である」もしくは「重要である」に集約され、70%以上のコンセンサスを得ることとなった。項目の文意や他の項目との重複性を見直したが、修正の必要性は

認めなかった。

4) 看護研究

大項目「看護研究」は、20の小項目から構成されていた。1回目の調査で70%以上のコンセンサスが得られた項目は、20項目中14項目であった。70%以上のコンセンサスが得られなかった6項目には、中項目「物・施設・設備」の中の2項目、「災害看護の研究をおこなうにあたり必要な物品・器材が利用できる状況にある(蔵書・雑誌・測定器・PCソフト、ラップトップ、文献データベースなど)」、ならびに「災害看護研究者が必要とする施設が整っている/利用できる(必要物品を置く場所、研究室、会議室、情報収集室など)」であった。また中項目「人」に関しては、1項目「所属組織や団体に災害看護研究を行っている人がいる」、さらに中項目「予算・費用」の中では、3項目「所属組織で災害看護研究を行うための予算の確保をされている(委員会費、調査費、視察費、集計・分析費など)」、「災害看護研究を行う上で使用できる公的な助成金が整備されている。」、そして「若手の研究者を育成する奨学金制度がある。」であった。

2回目調査では、これらの項目を含めて、20項目中20項目すべてが、70%以上のコンセンサスを得ることができた。3回目の調査でも結果は変わらず、20項目中20項目すべてが70%以上のコンセンサスを得ることができた。

項目の表現や他の項目との重複性を確認し、中項目「理念・心構え」の4項目の文意が明確になるように若干修正をし、下記のようになった。「研究を行なう上では、対象者に十分な倫理的な配慮を行なって、実施することが大切である。」、「研究を行なう上で、文化的特性に留意する。」、「研究を行なう上で、災害関連制度や復旧・復興の方針を知っておく。」、「研究成果の公表をし、還元する。」

(2) 海外調査結果

質問紙は20名の研究対象者に送付し、1回目は4名から返信があり、2回目は1回目に返信が得られた4名に対して送付し、2名から回答を得た。回答者が少ないことから、調査は2回までとしたが、結果は下記のとおりである。

1回目の調査では、ケア提供、看護教育、看護管理、看護研究のすべての項目で70%以上のコンセンサスが得られた。その一方で、「あまり重要ではない」と回答された項目が、国内調査結果より多く見られた。「あまり重要ではない」との回答が見られ項目は、ケア提供では、「物・施設・設備」の7項目中3項目、「予算・費用」の2項目中2項目、看護教育では、「人」の5項目中1項目、看護管理では、「物・施設・設備」の6項目中6項目、「組織・システム」の11項目中4項目、「地域特性・文化・制度」の3項目中1項目、「情報・コミュニケーション・ネットワーク」の5項目中2項目、「信念・心構え」の15項目中3項目であった。看護研究では、「あまり重要ではない」との回答は見られなかった。

2回目調査で70%以上のコンセンサスが得られた項目は、ケア提供では36項目中35項目、看護教育では20項目中20項目、看護管理では、55項目中51項目、看護研究では、20項目中20項目であった。

一方、70%以上のコンセンサスが得られなかった項目は、ケア提供の中項目「人」の中の1項目、「ケア提供者は、患者・地域住民・自主防災組織が災害時に対応できるように訓練・教育を行う。」であった。この項目は、1回目調査では70%以上のコンセンサスが得られていたが、2回目では回答に動きが見られた。

看護管理の中項目「信念・心構え」の中の「経験と知恵を生かして、状況に対応する。」、「最悪な状況を想定しながら、前向きに対応を考える心がまえを持つ。」、「あるもので創

意工夫し、当初を乗り切る心がまえを持つ」、「外部からの支援を率先して受ける、という心がまえを持つ」の各項目については、70%以上のコンセンサスが得られなかった。看護管理の4項目のうち2項目は、1回目調査時に「あまり重要ではない」に回答している者がいた項目であり、残りの2項目は、「どちらとも言えない」に回答している者がいた項目であった。これらの結果は、回答者数が少ないものの、日本国内調査結果とは異なっており、「信念・心構え」には価値観や文化等が反映されている可能性も考えられる。今後の探求が必要であろう。

5. 討議

国内外の調査共に1回目からの回答者数が少なく、それ故、その後の回答にも影響を与えた。調査協力者数が少ないことは、調査時期が学期始めや学期末等にかかったこと、また日本並びに世界において災害看護の専門家が少なく、本研究の前に実施した研究においても、調査協力を依頼していることから、協力者が調査に対して反復感を抱いた可能性も考えられる。しかし、本研究で得られた備え枠組みを元に(4大項目、7中項目、計130項目)看護の備え基準のさらなる追及が可能であると考えている。

6. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

大野かおり，牛尾裕子，村上眞須美，黒瀧安紀子，上泉和子，山本あい子，災害に対する看護の備え枠組みの構築 - ケア提供分野に関して - ，日本災害看護学会第16回年次大会，2014年8月19日，京王プラザホテル，東京

村上眞須美，上泉和子，黒瀧安紀子，大野かおり，牛尾裕子，山本あい子，災害に対する看護の備え枠組みの構築 - 看護管理分野に

に関して - ,日本災害看護学会第16回年次大会,2014年8月19日,京王プラザホテル,東京

Aiko Yamamoto, RN, Ph.D, Akiko Kurotaki, RN, MHSc, Yuko Ushio, RN, Ph.D, Kazuko

Kamiizumi, RN, MS, Masumi Murakami, RN, MSN, Kaori Ohno, RN, Ph.D, Development of the Framework of Disaster Preparedness for nursing focusing on nursing research in Japan, The 3rd International Conference of World Society of Disaster Nursing, June, 21, 2014, Beijing International Convention Center, Beijing, China

Akiko Kurotaki, RN, MHSc, Aiko Yamamoto, RN, Ph.D,

Kazuko Kamiizumi, RN, MS, Kaori Ohno, RN, Ph.D, Masumi Murakami, RN, MSN, Yuko Ushio, RN, Ph.D, Development of the Framework of Disaster Preparedness for nursing focusing on nursing education in Japan, The 3rd International Conference of World Society of Disaster Nursing, June, 21, 2014, Beijing International Convention Center, Beijing, China

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

7. 研究組織

(1) 研究代表者

山本あい子(YAMAMOTO Aiko)

兵庫県立大学・附置研究所・教授

研究者番号：80182608

(2) 研究分担者

上泉 和子(KAMIIZUMI Kazuko)

青森県立保健大学・健康科学部・教授

研究者番号：10254468

大野 かおり(OONO Kaori)

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：20300361

黒瀧 安紀子(KUROTAKI Akiko)

兵庫県立大学・附置研究所・講師

研究者番号：70593630

(3) 連携研究者

牛尾裕子 (USHIO Yuko)

兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：00275322

村上真須美 (MURAKAMI Masumi)

青森県立保健大学・健康科学部・助教

研究者番号：40457742